

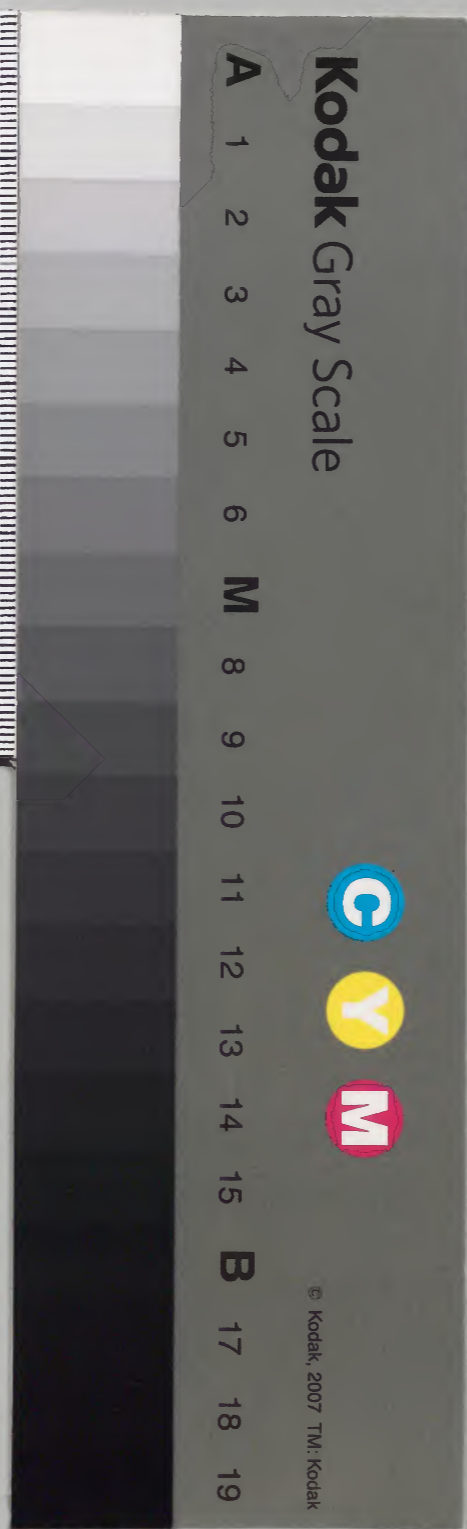
# 參考太平記

卅八

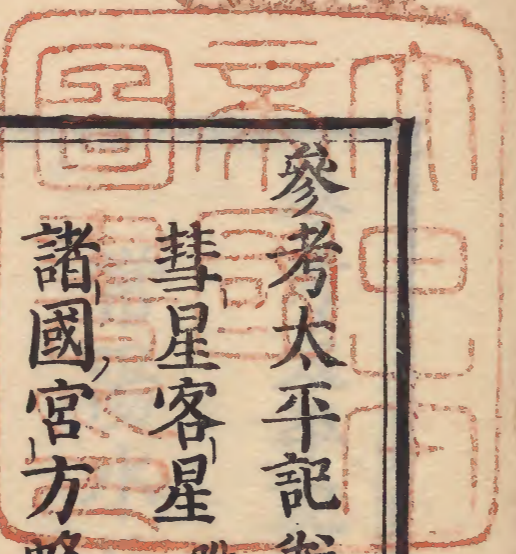
		和書門	
四	一	八五七〇	類
一	一	九三〇	號
冊	架	函	冊

庫文閣内		和書	
七	一	八五七〇	類
函	一	四一〇	號
冊	架	冊	冊

内閣文庫	
番號	和 8570
冊數	41( 39)
函號	167 75



平



參考太平記卷第三十八目錄

彗星客星 附湖水涸事

諸國宮方蜂起 附備前軍并桃井直常越中軍事

九州探題足利氏經下向事 此段除李將軍陣中禁女事

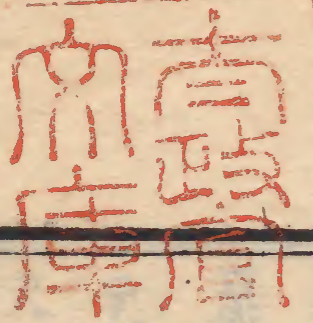
菊池少貳大友軍事

畠山兄弟楯籠修禪寺城 附遊佐入道自害事

細川清氏討死 附西長尾城没落事

和田楠與箕浦次郎左衛門軍事

大元軍事 今除之



參考太平記卷第三十八目錄

大元軍

味田

島山

廣所

大元

番國

慧星

參

參考太平記卷第三十八日給

參考太平記卷第三十八

常陽水戸府

魯齋今井弘濟將興甫 考訂  
著軒内藤貞顯仲微甫 重校

彗星客星 附湖水涸事

康安二年

南朝正平十七年  
北朝改元貞治

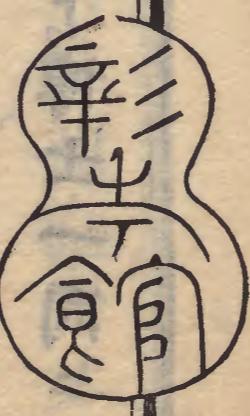
二月二都ニハ彗星客

星同時ニ出タリトテ天文博士トモ内裏へ召レ

テ吉凶ヲ占ヒ申ケリ客星ハ用明天皇欽明帝皇子橋豐日

天御宇ニ守屋佛法ヲ亡サントセシ時始テ見ヘ

タリケルヨリ今ニ至テ十四箇度考史籍所載自用明帝元



年至康安二年。客星出現。凡二十三度。然倭漢候見。必有異同。下倣之。其内二度ハ祥

瑞ニテ。十二度ハ大凶ナリ。彗星ハ皇極天皇御宇ニ

皇極帝者。敏達帝孫。名寶。新豐浦大臣ノ子。蘇我入

鹿力亂ヲ起シテ。中臣大兄皇子。敏達帝皇子。押坂

名麻呂古。今為中并中臣鎌子ト合戰ヲシタリシ

時。鎌子者。御食子。御子。一名鎌足。後改。始テ此星出

夕リシヨリ。今ニ至マテ。八十六箇度。自皇極帝元

年。至康安二年。彗一度モイマテ災難ナラスト云

事ナシ。尤天下ノ御慎ニテ候ヘシト。博士一同ニ

勘申ケレハ。諸臣皆色ヲ失テ。サレハヨ此亂世ノ

上ニハ。實モ世界國土カ金輪際ノ底ヘ落入カ。然

ラスハ異國ノ蒙古寄來テ。日本國ヲ擊取カニテ

コソアラメ。サル事有マシキ世トモ覺スト。面ケ

申合レケリ。誠ニ天地人ノ三災同時ニ出來ヌト

覺テ。去年康安七月ヨリ。歷代皇紀。皇年代畧記。及

今云。七日ケニ二三度ノ地震モイマテ休ス。又今

年ノ六月ヨリ。同十一月ノ始迄旱魃シテ。十一月

本作。十月。五穀モ登ス。草木モ枯萎シカハ。鳥八埒ヲ

失ヒ。魚ハ泥ニ息ツクノミナラス。人民共ノ飢死  
又ル事。所々ニ數ヲ知ス。此、時近江湖モ。三丈六尺  
天正本作<sup>レ</sup>。乾タリケルニ。様々ノ不思議アリ。白髭  
四五尺<sup>ニ</sup>。明神ノ前ノ澳ニ<sup>天正本作<sup>レ</sup>箕浦、澳</sup>二人シテ抱許ナル檜  
木ノ柱ヲアハヒ一丈八尺ツ、立並ヘテ。二町餘  
ニ渡セル橋見ヘタリ。古人ノ語り傳ヘタル事モ  
ナシ。古キ記録ニモ載ス。是ハ何様龍宮城ノ道ニ  
テソ有ラント云沙汰シテ。見ル人日々ニ羣集セ  
リ。又竹生嶋ヨリ<sup>天正本作<sup>レ</sup>高嶋</sup>箕浦迄<sup>天正本云。ヤカチノ濱迄</sup>水ノ

上三里<sup>西源院本</sup>瑪瑙ノ如クナル切石ヲ。廣二丈  
許ニ平ニ疊連<sup>ス</sup>テ。二河白道モ角ヤト覺タル道  
一通リ現シ出タリ。是モ如何様龍神ノ通路ニテ  
ソ有ラントテ。踏テハ渡ル人ナシ。只傍ノ浦ニ船  
ヲ浮ヘテ。見ル人市ノ如クナリ。此湖七度迄桑原  
ニ變セシヲ我見タリト。白髭明神。大宮權現ニ向  
テ仰ラレケルト云。古ノ物語アレハ。左様ノ桑原  
ニヤナランスラント。見ル人怪シニ思ヘリ。天地  
ノ變ハ既ニ如此。人事ノ變又サユソアランスラ

卷之三十一

三十一

メト思フ處ニ。國々ヨリ早馬ヲ打テ。官方蜂起シ  
夕リト告ル事。曾テ休時ナシ

諸國官方蜂起 附 備前軍 并 桃井直常越中軍

事

山陽道ニハ 西源院。天正本。作山陰。按伯耆屬山陰。道。美作屬山陽道。山名自伯耆赴美作。

則所謂山陰 同年六月三日ニ 今川家。毛利家。金勝院。西源院。天正本。作

六月二十七日。北條家。南山名伊豆守時氏五千餘

騎ニテ。伯耆ヨリ美作院莊へ打越テ。國々へ勢ヲ

差分ツ。先一方へハ。時氏子息左衛門佐師義ヲ 左

作右。下 大將ニテ二千餘騎。備前備中兩國へ發向

ス。一勢ハ備前仁堀ニ 西源院本 陣ヲ取テ 毛利家。

云。一方へハ。山名右衛門佐舍弟彈正少弼義理。二

千餘騎。備前備中へ發向ス。義理ハ七百餘騎引分

テ。備前仁堀ニ 敵ヲ待ニ。其國守護松田 天正本有

河村。福林寺。浦上七郎兵衛行景等。皆無勢ナレハ。

出合テハ叶ハシトヤ思ヒケシ。又讚岐ヨリ細川

右馬頭頼之。近日兒嶋へ推渡ルト聞ユルヲヤ相

待ケシ。皆城ニ楯籠テ。イマ夕曾テ戰ハス。一勢ハ

多治目備中守 多治目。金勝院 楯崎ヲ侍大將ニテ

千餘騎千。天正本備中、新見へ打出タル。秋庭三

郎西源院本作多年拵スレテ。水モ兵糧モ卓散多

ナル松山城へ。多治目、楢崎ヲ引入レカハ自秋庭

此。天正當國守護越後守師秀戰フヘキ様ナクシ

テ。備前、徳倉城へ引退ク刻天正本云。一方へハ多

百餘騎ヲ相添テ備中、新見ニ陣ヲ張。當國守護越

後守師秀、秋庭三郎諸共ニ得藏松山城ニ引籠ル。

云、郎從赤木父子二人落止リ思フ程戰テ遂ニ討

死シテケリ。是ニ依テ敵勝ニ乘。國中へ亂入テ。勢

ヲ差向差向攻出スニ。一儀ヲモ云ヘキ様ナケレ

ハ國中以下至此國人一人モ從ヒ附スト云者ナ

シ。只陶山備前守計今川家。毛利家。金南海ノ端

ニ添テ。僅ナル城ヲ拵テ。將軍方トテハ残りケル。

備後へハ富田判官秀貞カ子息、正少弼直貞今

家本作真貞八百餘騎。出雲ヨリ直ニ國中へ打出タル

ニ。江田、廣澤、三吉ノ一族馳著ケル間。程ナク二千

餘騎ニナリニケリ。富田其勢ヲ合テ。宮下野入道

カ城ヲ攻ントスル處ニ。石見國ヨリ。足利左兵衛

佐直冬。五百騎許ニテ。富田ニカヲ合セント。備後

宮内へ出ラレタリケルカ。禪僧ヲ一人。宮下野入道ノ許へ使ニ立テ仰ラレケルハ。天下ノ事時刻到來シテ。諸國ノ武士。大畧御方ニ志ヲ通スル處ニ。其方ヨリ曾テ承ル旨ナキ間。遮テ使者ヲ以テ申ナリ。天下ニ人多シトイヘトモ。別シテ憑思ヒ奉ル志深シ。今若御方ニ參シテ。忠ヲ致サレ候ハハ。關所分已下ノ事ニ於テハ。每事所望ニ從フヘシトソ宣ヒ遣サレケル。宮入道道山北條家。南都本。作道仙。下先城へ使者ノ僧ヲ呼入テ。默心ヲ調禮儀ヲ厚

クシテ對面アレハ。使者ノ僧。今ハカフト嬉シク思フ處ニ。彼禪門道山。僧ニ向テ申ケルハ。天下ニ一人モ宮方ト云人ナク成テ。佐殿モ憑方ナク成セ給ヒタラシ時。サリトテハ憑ソト承ラハ。若憑レ進ラスル事モヤ候ハシスラシ。今時近國ノ者共多ク佐殿ニ參リテ。勢附セ給フ間。當國ニ陣ヲ召レテ。參レト承ラシニ於テハ。エユソ參リ候マシケレ。憎シ其儀ナラハ。討テ進ラセヨトテ。御勢ヲ向ラレハ。尸ハ縦御陣ノ前ニ曝サルトモ。魂



ハ猶將軍ノ御方ニ留リテ。怨ヲ泉下ニ報セシ事  
ヲ計ヒ候ヘシ。抑加様ノ使ナトニハ。御内外様ヲ  
云ス。然ヘキ武士ヲコソ立ラル、事ニテ候ニ。僧  
體ニテ使節ニ立セ給フ條。心得カタクコソ覺テ  
候ヘ。文殊佛ノ御使ニテ。維摩ノ室ニ入。玄奘ノ大  
般若ヲ渡サントテ。流沙ノ難ヲ凌キシニハ様易  
テ。是ハ無慚無愧無道心ノ御舉動ニテ候ヘハ。僧  
聖ト申マシ。御首ヲ懸テ路頭ニ懸度候ヘトモ。今  
度計ハ別儀ヲ以テ赦シ申ナリ。向後懸ル使ヲシ

テ。生テ歸ルヘシトナ覺シテ。御分誠ニ僧ナラハ。  
懸ル不思議ノ事ヲハヨモ仕給ハシ。只此城ノ案  
内見シ為ニ。夜討ノ手引シツヘキ人カ。貌ヲ禪僧  
ニ作立ラレテテ。是ヘハオハシタルラン。ヤ、若  
黨共。此僧ツレテ城ノ有様能ク見セテ後。城戸ヨ  
リ外ヘ追出シ奉レトテ。後ノ障子ヲアラ、カニ  
引立テ内ヘ入ハ。使者ノ僧今ヤ失ハル、ト。膽心  
モ身ニツハテ。匍々逃テリ歸リケル。此使歸ラハ  
佐殿定テ寄給ハシスラン。先スル時ハ人ヲ制ス

ルニ利アリ。逆寄ニ寄テ追散セトテ。子息下野次  
即氏信ニ。五百餘騎ヲ差副。佐殿ノ陣ヲ取テオハ  
シマス。宮内ヘ推寄。懸立懸立攻ケルニ。佐殿ノ大  
勢共。立足モナク打負テ。散々ニ皆成ニケレハ。富  
田モ是ニカヲ落シテ。己カ本國ヘソ歸リニケル。  
直冬朝臣。宮入道ト合戦ヲスル事其數ヲ知ス。然  
共直冬一度モイマタ打勝給ヒタル事ナケレハ。  
云甲斐ナシト思フ者ヤシタリケン。落書ノ歌ヲ  
札ニ書テ。道ノ岐キマニソ立タリケル

直冬ハイカナル神ノ罰ニテカ。宮ニハサノミ  
怖テ逃ラン

侍大將ト聞ヘシ森備中守モ

森。西源院  
本作。毛利

佐殿ヨリ

前ニ逃タリト披露アリケレハ。高札ノ奥ニ

楯ノ葉ノ

楯。毛利家。金勝院。西  
源院。天正本。作。楯

ユルキノ森ニイ

ル鷲ハ。ミヤマオロシニ音ヲヤ鳴ラン

但馬國ヘハ。山名右衛門佐。舍弟治部大輔

按。系圖。  
毛利家。

為得天正本。作。中務。小林民部丞ヲ侍大將ニテ二千餘

騎。大山ヲ經テ。播磨ヘ打越ントテ出タリケルカ。

但馬國守護仁木彈正少弼按頼勝嘗從義長既而逃丹後不知何時又屬

將安良十郎左衛門將軍方ニテ楯籠タル城毛利家天正安

夕落サリケル間長九郎左衛門尉毛利家天正安

保入道信禪已下ノ宮方トモ我國ヲ差置テ他國

へ越ル事ヲ得スサラハ小林力勢計ニテモ毛利家天

正本小林上載播磨へ打越ント企ル處ニ赤松掃

部助直頼大輔大山ニ城ヲ構テ但馬ノ通路ヲ差塞キ

ケル程ニ小林難所ヲ支ラレ丹波へソ打越ケル

丹波ニハ當國守護仁木兵部大輔義尹按系圖大輔毛利家

本作少輔非也頼章子兼テ在國ニテ待懸タル事ナレハ聽

テ合戰有ヌトコソ覺ケルニ粗忽ニ軍シテハ中

中惡カリヌトヤ思ハレケン和久郷ニ陣ヲ取テ

天正本云和久ニ陣ヲ取テ京互ニ敵ノ懸ルヲソ

相待ケル西源院本云義尹イニ夕戰ハニトモ世

ニ敵ノカ丹波ハ京近キ國ナレハ暫モ差置へ

キニアラス急大勢ヲ下シテ義尹ニカヲ合ヨト

テ若狹守護尾張左衛門佐入道心勝尾張天正本

家本尾張上有石橋字二說共為得本文及諸異本

世之後。道心不怠。出家終身。而今重出於此。此者相齟齬。毛利家。天正本。作石橋左衛門。佐入道者。為得按。園太曆。觀應二年七月二十九日。今曉左衛門。佐遠和。義出家。云々。詳出第三十卷。尊氏兄弟和睦。段遠江。守護今川伊豫守。三河守護大島遠江守。天正本作新田左衛門。佐義高。毛利家本。作大島遠江守。三人。二三新田。義高。而此。下三人。作四人者。恐非也。三箇國ノ勢ヲ相副テ三千餘騎。京都ヨリ差下サ。ル。其勢已ニ丹波篠村ニ著シカハ。當國ノ兵共。心ヲ兩方ニ懸テ。何方ヘカ附マシト思案シケル者共。今ハ將軍方ヲ強カラシラント見定テ。我先ニ十馳附ケル程ニ。篠村ノ勢ハ日々ニ増テ。程ナ

ク五千餘騎ニ成ニケリ。山名カ勢ハ。纔ニ七百餘騎。國遠クシテ兵糧乏シク。馬人疲レテ城ノ構密シカラス。此下迄桃井直常之上。天正本不出。而角尺云。山名小林。乏於運送。因歸國。云云。テハ如何堪ヘキ。聞落ニソセンラント覺ケル處ニ。小林右京亮。西源院本。作民部丞。按此。上諸本。竝作民部丞。似齟齬。伯耆國ヲ出シヨリ。今度天下ヲ動ス程ノ合戦ヲセス。ハ。生テ再本國ヘ歸ラシト。申切テ出タリシカハ。少モ騷ヘキニ非ス。一町ニテ討死セント。氣ヲ勵シ心ヲ一ニスル兵共。神水ヲ飲テ。已ニ篠村ヲ立

ト聞シカハ。何クニテモ廣三へ懸合テ。組打ニ討  
 ント議シケル間。篠村ノ大勢是ヲ聞テ。却テ寄ラ  
 レヤセンスラント。二日路ヲ隔タル敵ニ恐レテ。  
 一足モ先へハ進マズ。木戸ヲ構へ。逆茂木ヲ引テ。  
 用心嚴シクテハ居タリケレトモ。小林兵糧ニツ  
 マリテ。又伯耆へ引退ケレハ。御敵ヲハ早追落シ  
 テ候トテ。氣色ハウテソ歸洛シケル。越中ニハ。桃  
 井播磨守直常此下天正本說甚簡省與信濃國ヨ  
 本文不同詳出下可合見リ打越テ。舊好ノ兵共ヲ相語フニ。當國守護尾張

大夫入道ノ代官。鹿草出羽守カ國ノ成敗漫ナル  
 ニ依テ。國人舉テ是ヲ背ケルニヤ。野尻井口長澤。  
 倉光ノ者共西源院本  
 不載澤直常ニ馳附ケル程ニ。其勢  
 千餘騎ニ成ニケリ。桃井驥テ勢ニ乘テ。國中ヲ押  
 ニ手ニサハル者ナケレハ。加賀國へ發向シテ。富  
 樫ヲ攻ントテ打出ケル。能登加賀越前ノ兵共是  
 ヲ聞テ。敵ニ先ヲセラレシト。相集リテ三千餘騎。  
 越中國へ打越テ。三箇所ニ陣ヲ取。桃井ハイツモ  
 敵ノ陣イマ夕取ヲホセヌ所ニ。懸散スヲ以テ利

トスル者ナリケレハ。逆寄ニ推寄テ攻戰フニ。越  
 前ノ勢一陣先破レテ。能登金勝院本越中ノ兩陣  
 モ全カラス。十方ニ散テソ落行ケル。日暮レハ桃  
 井本ノ陣へ打歸テ。物具脱テ休ケルカ。夜半許ニ  
 些評定スヘキ事アリトテ。此陣ヨリ二里許隔夕  
 ル井口カ城へ。誰ニモ角トモ知セスシテ。只一人  
 ソ行タリケル。此時シモ能登加賀ノ者共三百餘  
 騎。打連テ降人ニ出タリケルカ。執事ニ屬シテ。大  
 將ノ見參ニ入シト申間。同道シテ大將ノ陣へ參

シ。事ノ由ヲ申サントスルニ。大將ノ陣ニ人一人  
 モナシ。近習ノ人ニ尋ヌレ共。何クヘカ御入候ヌ  
 ラシ。イマ夕宵ヨリ大將ハ見ヘサセ給ハヌナリ  
 トソ答ケル。陣ヲ並ヘタル外様ノ兵共是ヲ聞テ。  
 サテハ桃井殿落ラレニケリト騒テ。我モ何クヘ  
 カ落行ニシト。物具ヲ著モアリ捨ルモアリ。馬ニ  
 乗モアリ騎ヌモアリ。ヒタヒシメキニヒシメク  
 間。燒捨タル火。陣屋ニ燃著テ。燎原ノ焰盛ナリ。是  
 ヲ見テ降人ニ出タリツル三百餘騎ノ者共。カラ

ハイサ落行敵トモヲ打取テ。我高名ニセシトテ。  
籠ヲ敲キ開ヲ作テ。追懸追懸撃ケルニ。返合セテ  
戦ハントスル人ナケレハ。此ニ追立ラレ彼ニ斬伏  
ラレ。討ル者二百餘人。生捕百人ニ餘レリ。桃井  
ハイマタ井口城へモ行著ス。道ニテ陣ニ火ノ懸  
リタルヲ見テ。是ハ何様返忠ノ者有テ。敵夜討ニ  
寄タリケリト心得テ。立歸ル處ニ。逃ル兵トモ行  
合テ。息ヲモツキアヘス。只引セ給へ。今ハ叶フニ  
シキニテ候ソト申合ケル間。カ及ハス桃井モ。共

ニ井口城へ逃籠ル。晝ノ合戦ニ打負テ。御服峯ニ  
逃上リタル加賀越前ノ勢トモ。桃井カ陣ノ焼ル  
ヲ見テ。何トアル事ヤラント恠シク思フ處ニ。降  
人ニ出テ。心ナラス高名シツル兵共三百餘騎。生  
捕ヲ先ニ追立サセ。鋒ニ首ヲ貫テ馳來リ。鬼神ノ  
如ク申ツル桃井カ勢ヲコソ。我等僅ノ三百餘騎  
ニテ夜討ニ寄テ。許多ノ御敵共ヲ打取テ候ヘト  
テ。假名實名事新シク。コトコトシケニ名乗申セ  
ハ。大將鹿草出羽守ヲ始トシテ。國々ノ軍勢ニ至

迄。哀大剛ノ者共カナ。此人々ナクハ。事カ我等カ  
會稽ノ恥ヲハ雲カニシト感セ又人モ無リケリ。  
後ニ生捕ノ敵トモカ。委シク語ルヲ聞テコソ。サ  
テハ降人ニ出タル不覺ノ人トモカ。倒ル、處ニ  
土ヲ廻ム風情ヲシタリケルヨトテ却テ憎ニ笑  
ハレケル

○天正本云。桃井播磨守直常。信濃ヨリ起テ越中  
國へ打出。舊好ノ兵ヲ語フニ。野尻井口。長倉光  
播磨守ニ馳加リケル間。聽テ大勢ニ成ニケリ。

桃井其勢ヲ并テ。加賀國へ發向シ。富樫介ヲ攻  
ント打立ケル間。能登加賀越前ノ勢共。是ヲ聞  
テ。鹿草出羽守ニカヲ合セ。三所ニ陣ヲ張急ニ  
拉テ攻戰フ間。桃井終ニ打負テ井口城ニ引籠  
レハ。是ヨリ北國ハ富樫介ニ挑マレ。其儘無為  
ニ成ニケリ。云云

九州探題足利氏經下向事 此段除李將軍  
陣中禁女事

筑紫ニハ少貳大友以下ノ將軍方ノ勢トモ。菊池  
ニ追スヘラレテ。已ニ又九州宮方ノ一統ニ成ヌ



ト見へケレハ。探題ヲ下シテ少貳大友ニカヲ合  
 セテハ叶フマシトテ。尾張大夫入道ノ子息左京  
 大夫氏經ヲ九州ノ探題ニ成テソ下サレケル。左  
 京大夫先兵庫ニ下リテ。四國中國ノ勢ヲ催シケ  
 レトモ。附從フ勢モ無リケレハ。サリトテハ道ヨ  
 リ引返スヘキニ非ストテ。僅二百四五十騎ノ勢  
 ニテ二百。毛利家。北條家。西源院。南都。天正已ニ本。作。一。頁。金勝院。本作。三百五十餘騎。纜  
 ヲ解ケルニ。左京大夫ノ屋形船ヲ始トシテ。士卒  
 ノ小舟共ニ至マテ。傾城ヲ十人二十人載又舟ハ

無リケリ。礮ニ立並テ是ヲ見物シケル者トモノ  
 中ニ。些チコサカシケナル遁世者ノ在ケルカ。尙タヘ  
 ノ人々ニ向テ申ケルハ。筑紫九箇國ノ大敵ヲ滅ヌ  
 サントテ。討手ノ大將ヲ承ル程ノ人ノ。是程物ヲ  
 知テハ。何トシテカ大功ヲ成ルヘキ。夫大敵ニ向  
 テ陣ヲ張。戰ヲ決セントスル時兵氣ト云事アリ。  
 此兵氣敵ノ上ニ覆オテ立時ハ。戰必勝事ヲ得。若陣  
 中ニ女多ク交テアル時ハ。陰氣陽氣ヲ消故ニ兵  
 氣曾テ立上ラス。兵氣立サレハ。縱大勢ナリトイ

トモ勝事ヲ得ストイヘリ

此下載李廣陣中殺女子事而其說虛妄

正史無之大敵ノ國ニ臨ム人ノ兵ヲハ次ニシテ

先女ヲ先立給フ事心得ラレスト難シ申ケルカ

果シテ幾程ナク高崎城ニモ堪ヘス高崎天正本作高峯非也

淺マシキ體ニテ上洛シ給ヒシカ面自ナクヤ思

ハレケシ。尼崎ニテ出家シテ諸國流浪ノ世捨人

ト成ニケリ

菊池少貳大友軍事

左京大夫已ニ大友カ館ニ著又ト聞ヘケレハ菊

池肥後守武光敵ニ勢ノ著又先ニ打散セトテ菊

池彦次郎金勝院本作彦三郎下城越前守宇都宮

岩野鹿子木民部大輔金勝院本云名貞貞下田帶刀以下勝

タル兵五千餘騎ヲ差副テ五千今川家本作五探

題左京大夫ヲ左京大夫上毛利家北條攻ニ為ニ

九月二十三日毛利家本豊後國へ發向ス探題左

京大夫是ヲ聞テ抑我九州靜謐ノ為ニ下サレタ

ル者カ敵ノ城へ寄スシテ却テ敵ニ寄ラレタリ

ト京都へ聞ヘンスル事先武略ノ足サルニ相似

夕リ。サレハ敵ヲ城ニテ相待マテモ有マシ。路次

ニ馳向テ戰ヘトテ。探題ノ子息松王丸天正本傳幸得丸下

之。イマ夕幼稚ニテ。今年十一歳ニ成ケルヲ大將

ニテ。太宰少貳舍第筑後二郎金勝院。天正同新左

衛門尉按第三十三卷菊池合戰段諸本茲載宗像

大宮司。松浦一黨都合其勢七千餘騎ニテ。筑前國

西源院本本長者原ト云所ニ馳向テ。路ヲ遮テソ待

懸夕ル。同二十七日ニ。菊池彦二郎五千餘騎ヲ二

手ニ作り。長者原へ推寄テ戰ケルニ。岩野鹿子木

將監南都本傳下田帶刀已下。宗徒ノ勇士三百餘

騎討レテ。其日ノ大將菊池彦二郎。三所マテ割ヲ

被リケレハ。宮方ノ軍勢已ニ二十餘町引退二十。

本作三十一。北條家。西源院。南又ハヤ打負又ト見へ

ケル處ニ。城越前守五百餘騎入代テ戰ケルニ。少

貳筑後二郎金勝院。天正本。此。上作同新左衛門尉

二人。共ニ一所ニテ討レ又少貳家譜云。對馬次郎

後次郎春鶴丸。於其外松浦宗像大宮司力一族若

黨。四百餘人討レニケレハ四百。今川家探題少貳

大友二度目ノ軍ニ打負テ。皆散クニ成ニケリ。菊池已ニ手合ノ軍ニ打勝シカハ。探題ノ勇威モ恐ルハニ足スト侮テ。菊池肥後守武光。新手ノ兵三千餘騎ヲ率レテ。舍弟彦次郎カ勢ニ馳加テ。豊後府へ發向ス。是迄モ猶探題少貳大友松浦宗像カ勢ハ。七千餘騎有ケルカ。菊池ニ氣ヲ吞レテ。懸合ノ合戦叶フマシトヤ思ヒケン。探題ト大友トハ。豊後高崎城ニ引籠リ。太宰少貳ハ岡城ニ楯籠リ。大宮司ハ宗像城ニ籠リテ。嶮岨ヲ命ニ憑ケレハ。

九

菊池豊後ノ府ニ陣ヲ取。三方ノ敵ヲ物トモセス。三八城ノ中ヲ推隔テ。今年ハ已ニ三年迄遠攻ニコソシタリケレ。抑少貳大友ハ大勢ニテ城ニ籠リ。菊池ハ小勢ニテ是ヲ圍ム。菊池カ兵必シモ皆剛ナルヘカラス。少貳大友カ勢必シモ皆臆病ナルヘキニアラス。只士卒ノ剛臆ハ。大將ノ心ニヨル故ニ。九國ハ加様ニ成ケルナリ。

畠山兄弟楯籠修禪寺城。附遊佐入道自害事。筑紫ニハ宮方蜂起ストイヘトモ。東國ハ程ナク

後醍醐天皇御紀

靜シヅリ又。去年ヨリ康安元年畠山入道道誓。舍弟尾張守

義深毛利家。天正本。載。舍弟式部。大輔。國熙。毛利家本。或。作義國。前後不一。作國熙者。非也。下。勲之。

伊豆。修禪寺ニ楮籠テ。東八箇國ノ勢ト戦ケルカ。

兵糧盡テ落方モナカリケレハ。皆城中ニテ討死

セントス。左馬頭殿ヨリ使者ヲ以テ先非ヲ悔テ。

子孫ヲ思ハハ。頸ヲ延テ降參スヘキ由仰ラレケ

ルヲ。誠ソト信シテ。道誓ハ禪僧ニナリ。舍弟尾張

守ハ。伊豆國守護職還補ノ御教書ヲ賜テ。九月十

日今川家。毛利家本。作十一月十日。北條家。南都本。作十一月二日。金勝院本。作九月十一日。西源院

本作十一月二十一日。天降參シタリケルカ。道誓  
正本作十一月二十五日。且降參シタリケルカ。道誓  
ハ伊豆ノ府ニ居テ先舍弟尾張守ヲ。鎌倉左馬頭  
ノオハスル箱根ノ陣ヘソ參ラセケル道誓居伊豆府以下。

金勝院  
本不出

○天正本云。畠山道誓。舍弟義深。其弟國熙堂作義熙。下。勲。

去年ヨリ修禪寺城ニ楮籠リ。東八箇國ヲ拉

キ。思フ様ニソ戦ケル。サレトモ遙トケノ日數ナ

レハ。轉漕ニ疲テ。兵皆死ヲ一途ニ思ヒ定タリ

ト聞ヘシカハ。是ヲ對治セハ。許多ノ御方ヲ亡

後醍醐天皇御紀

スヘシト思案ノ餘ニ。サラハ偽テ招出スヘシトテ。左馬頭殿ヨリ御使ヲ以テ仰ラレケルハ。不義行跡重疊ストイヘトモ。先非ヲ悔。子孫ヲ思ハハ。兇ヲ脱軍門ニ參ルヘシトテ。伊豆守護職還補ノ御教書ヲソ成レケル。是ニ依テ兄弟様々評定有テ。此上ハトテ。十一月二十五日。箱根城ヘソ出ラレケル。舊好ヲ存シ。弓矢ノ名ヲ執ケル者黨共五百餘人。誠ニ思ヒ切タル體ニテ。前後ニ相從タリケル間。左右ナク誅セラル

參拜紀略

三

ヘキ様ソ無リケル。角テ御陣へ參ラル。云云下

舊好アル人ハ。萬死ヲ出テ。二度見參ニ入事ノ嬉

シサヨナト云テ。一獻ヲ勸メ。此程情ナクアタリツ

ル傍輩ハ。イツシカ媚諛テ。言ヲ卑クシ禮ヲ厚ク

シテ。頻ニ追從ヲシケル間。門前ニ鞍置馬ノ立止

隙モナク。座上ニ酒肴ヲ置連子又時モ無リケリ。

角テ三四日天正本作經テ後自此上舊好人迄此

本不出。而云懸リケレトモ。左馬頭モ諸軍勢モ。イ

夕退散セス。是ハ何トアル事ヤラント。道誓身

參拜紀略

三

ヲ危フ三テ思ヒ九月十八日夜九月十八日毛利家北條家南都本  
 ケル處ニ云々作十一月十八日天稻生平次北條家西源院南都  
正本作十二月五日且稻生平次本作平次兵衛天正  
本作平次潛ニ來テ道誓ニ耳語ケルハ降參御免  
 ノ事ハ元來出拔ルノ事ニ候ヘハ明日討手ヲ向  
 ラルヘキニテ候ナル實モ聞ニ合セテ豊島因幡  
 守俄ニ陣ヲ取易テ道ヲ差塞ク體ニ見ヘテ候勝金  
院本無聞豊嶋今夜急何クヘモ落サセ給フヘシ  
要道路之文  
 トソ告タリケル道誓聞モ敢ス舍弟式部大輔ニ  
 今川家毛利家金勝院本作尾張守天正本載式部  
 大輔尾張守二人按毛利家金勝院天正本等不載

本文此下尾張守義深匿結城陣營而云屹ト胸ニ  
 道誓義深共逃藤澤云云與本文不同屹ト胸ニ  
 欠ルカ假初二出ル由ニテ中間一人ニ太刀持セ  
 中間毛利家天兄弟二人徒歩ニテ其夜先藤澤ノ  
正本作稻生道場迄ソ落タリケル上人甲斐甲斐敷馬二匹時  
 衆二人相副テ夜晝ノ界モナク馬ニ鞭ヲ進メテ  
 上洛シケルヲハ知人更ニ無リケリ舍弟尾張守  
 義深ハ箱根ノ御陣ニ有ケルカ翌ノ夜或時衆ノ  
 懸ル事ト告ケルニ驚テサテハ我モ何クヘカ落  
 ナシト案スレ共東西南北皆道塞リテ落ヘキ

方モ無リケレハ。結城中務、大輔カ陣屋ニ來テ源西  
 院本無。中務字。ヒラニ憑ヘキ由ヲ宣ヒケル。是ヲ隱サ  
 レスル事ハ。至極ノ難儀ナレトモ。弓矢取身ノ習。  
 人ニ憑マレテ叶ハシト云事ヤ有ヘキト思ヒケ  
 レハ。長唐櫃ノ底ニ穴ヲアケテ氣ヲ出シ。其櫃ノ  
 中ニ伏サセテ。數十合昇連子タル鎧唐櫃ノ跡ニ  
 夕テ。態鎌倉殿ノ御馬廻ニ供奉シテ。尾張守ヲハ  
 夜ニ紛レテ藤澤ノ道場ヘソ送リケル。命程惜ム  
 ヘキ者ハナカリケリ。此人遂ニハ御免有テ。越前

ノ守護ニ補セラレ越前。北條家。南都國ノ成敗穩  
 ニテ。土民ヲ安セシカハ。鱈ノ淵ヲ去。蝗ノ境ヲ出  
 ル計ナリ尾張守義深在箱根。以遊佐入道性阿ハ。  
 主ノ落ラル。糶ヲ聽テ知タリケレトモ。暫人ニ  
 アヒシラヒテ。主ヲ何クヘモ落延サセシ。為ニ。少  
 モ騷タル氣色ヲ見セス。碁雙六十服茶ナト飲テ。  
 サリケナキ體ニテ笑戲テ居タリケレハ毛利家。北條家。  
 金勝院。南都本ニ云三日。即從共モ外様ノ人モ。思寄  
 三夜迄過シケル。云々。遂ニ隱ルヘキ事ナラ子ハ。畠



參事林平言

山兄弟落タリト沙汰スル程コソ有ケレ。臙テ討  
手ヲ向ラルト聞ヘケレハ。遊佐入道ハ。禪僧ノ衣  
ヲ著テ。只一人京ヲ志テソ落行ケル。鬼角シテ湯  
本迄落タリケルカ。行合人ニ口脇ナル創ヲ隠サ  
シ為ニ。袖ニテ口覆シテ過ケルヲ。見ル人中々ア  
ヤシメテ。帽子ヲ脱セ袖ヲ引ノケ、ル間。口脇ノ  
創隠ナク顯レテ。道ルヘキ様無リケレハ。宿屋ノ  
中門ニ走上リテ。自吭カキ放テ毛利家天正本云。  
リテ。近附者二人取テ引寄遊佐中門ニ走上返ス刀ニ腹切テ。袈  
殺シ。自ラ喉ヲカキ放下同返ス刀ニ腹切テ。袈

三

袈引被キテ死ニケリ。江戸修理亮ハ。龍口ニテ生  
捕レテ斬レヌ。其外此ニ隠レ彼ニ落行ケル郎從  
トモ六十餘人。或ハ搜出サレテ斬レ。或ハ追懸ラ  
レ腹ヲ切。目モ當ラレヌ有様ナリ  
○毛利家天正本云。中ニモ譽田六郎左衛門入道  
性意ハ。駿河國ニテ逃上リシヲ。守護代怪ニ囚  
テ。禁籠シタリト聞ヘシカハ。子息彌三郎尋行  
テ命ニ代ラント懇ニ所望シケルヲ。父ノ入道  
全ク我子ニアラスト陳シケルヲ。子息彌三郎

水滸本記

三

涙ヲ拭テ申ケルハ。御命ニ代ラント申ヲ。親ノ  
 慈悲ナレハ歎思召。加様ニハ仰候カ。抑父子ノ  
 儀ニテ候ハスハ。懸ル處へ尋參。御命ニ代ラン  
 ト申候へキカ。中々還テ愚ナル御事候ヤト申  
 ケレハ。警固ノ武士モ是ヲ聞テソノ口ニ涙ヲ  
 ソ流シケル。則此由ヲ守護モ申入ケレハ。今川  
 入道心省是ヲ聞テ。父子ノ高義ノ哀ニヤサシ  
 キ事ヲ感シテ。父子共ニ死罪ヲ赦サレタリ。聞  
 人モ袖ヲソ濡シケル。云云

畠山入道兄弟。甲斐ナキ命助リテ。七條ノ道場へ  
 夜半許ニ落著タリケルヲ

自此至段尾。天正  
本不同。別出于下

○天正本云。其後畠山入道兄弟ハ。路次仔細ナク  
 京著アリテ。七條道場ニ姑隱レ居給ヒシカ。尚  
 其憚アリトテ。宇治邊ニ由來ヲ尋。我廬ヲ占テ。  
 中々安閑ヲソ樂ニ給ヒケル

此下毛利家本亦  
載在本文段末。説

見于 角テ日數ヲ經ル程ニ。上意仔細ナク寛免

ノ御沙汰有テ。尾張守義深。式部大輔國熙。召出  
 サル、ノ三ナラス。攝州中島ノ強敵ヲ鎮メ。暫

南國ノ固ニテアリシカ。幾程ナクシテ。越前國

毛利家本作守護職ヲ賜テ。忽ニ絶ントスル一

家ヲ興シ給ヒケル。云云 按第三十九卷道朝下

張修理大夫入道道朝據越前時畠

聖ヒ二三日勞リ奉リテ。道ノ案内者少々相副テ。行

路ノ資タナト様々ニ用意シテ。南方ヘツ送ラレケ

ル。道誓暫宇知郡ノ在家ニ立寄テ。楠力方ヘ降參

ノ綸旨ヲ申テタヒ候ヘト。宣ヒ遣サレタリケレ

トモ。楠サシモ許容ノ分ナカリケレハ

○西源院本云。南方ノ公儀ニ。去々年既當山對治

ノ事申請。二十萬騎ニテ關東ヨリ上洛シ。君ヲ

惱シ奉ル大惡人。勢盡テ身ノ置所ナキ儘ニ。降

參申ヲ御免有ハ。何ノ御用ニカ立ヘキトテ。御

許容ナシ。云云

宇智郡ニモ隱レ得ス。都ヘ立歸ヘキ方モナシ。南

都山城脇邊ニ。トアル禪院律院。或ハ山賤ノ柴ノ

庵。賤カフセ屋ノサヒシキニ。袂ノ露ヲ片敷テ。夜

ヲ重カ又ヘキ宿モナク。道路ニ袖ヲヒ口ケ又計ニ

テ。朝三暮四ノ資ニ。心有人モカテト。身ヲ苦シメ  
 タル有様。聞ニ耳冷シク。見ルニ目モアテラレズ。  
 幾程モナク兄弟共ニハカナク成ケルコソ哀ナ  
 レ。毛利家。北條家。南都本。無。畠山兄弟死之句。而。毛  
 利家本至。段尾。載經。尾張。守義。深。式部。大輔。國  
 熙。被。赦。事。等。皆。同。天。正。人。間。榮。耀。風。前。塵。上。白。居。易  
 本。詳。出。于。上。可。并。見  
 カ作り。富貴草頭露ト杜甫カ作りシモ理カナ。此  
 人々去々年春ハ。三十萬騎カ大將トシテ三十萬  
 本作二十萬為得第三十四南方へ發向シタリシ  
 卷云。畠山率二十萬云云  
 カハ。德風遠夕扇テ靡カ又草木モナカリシニ。イ

ツレカ三年ヲ過ス。生ナカラ恥ヲ曝シテ。敵陣ノ  
 境ニサマヨヒヌル事。更ニ直事トハ覺ス。此人ニ  
 出拔レ討レシ。新田左兵衛。佐義興怨靈ト成テ。吉  
 野ノ御廟へ參タリケルカ。畠山ヲハ義興カ手ニ  
 懸テ。生ナカラ軍門ニ恥ヲ曝サスヘシト奏シ申  
 ケル由。先立テ人ノ夢ニ見テ。天下ニ披露アリシ  
 モ。誤ニテハナカリケリト。今コソ思ヒ知レタレ

細川清氏討死 附 西長尾城没落事

讚岐ニハ細川相摸。守清氏ト。細川右馬頭頼之ト

數月戰ヒケルカ。清氏遂ニ討レテ。四國事故ナク  
 静リニケリ。其軍ノ様ヲ傳聞ニ。相摸守四國ヲ打  
 平ケテ。今一度都ヲ傾ケテ。將軍ヲ滅シ奉ラント  
 企テ。堺浦ヨリ船ニ乘テ。讚岐へ渡ルト聞ヘシカ  
 ハ。相摸守カ從兄弟兵部大輔當作少輔。按名氏春。淡路國ノ  
 勢ヲ率レテ淡路。金勝院本。作讚岐。三百餘騎ニテ馳著今川  
 家。毛利家。金勝院本。其弟掃部助按名信氏。氏春弟。讚岐國ノ勢  
 ヲ相催レテ。五百餘騎ニテ馳加ル。小笠原宮内大  
 輔小笠原。毛利家本不出。阿波國ノ勢ヲ率レテ。三百餘騎ニ

テ三百。天正本。作千三百。馳著ケル間金勝院本。自掃部助至。此不出。毛利家本。自小  
 笠原至此不出。而毛利家北條家。金勝院南都清氏  
 本云。此外四國ノ勢共。此彼ヨリ馳加ル云々。  
 ノ勢ハ程ナク五千餘騎ニ成ニケリ五千。西源院。天正本。作三  
 千。其比右馬頭賴之ハ。山陽道ノ西源院本。作西國。蜂起ヲ  
 鎮ントテ。備中國ニ居タリケルカ。此事ヲ聞テ。備  
 中備前兩國勢西源院。天正本。作備後。千餘騎ヲ率レ千。毛利  
 家。金勝院。南都。讚岐國へ推渡ル天正異本云。清氏對。治ノ御教書成レシ  
 都本。作六百頁。カハ。賴之讚岐ニ渡。云々。此時若相摸守敵ノ船ヨリアカラシ  
 スル處へ馳向テ戰ハ。一戰モ利アルニシカリ

參考太平記 卷三

シヲ。右馬頭飽マテ心ニ智謀有テ。機變時ト共ニ  
消息スル人ナリケレハ。兼テ母儀。禪尼ヲ以テ儀母  
禪尼。西源院 相摸守ノ許ヘ言遣シケルハ。將軍羣  
本作使者 小ノ讒佞ヲ正サレズ。貴方科ナキ刑罰ニ向ハセ  
給ヒシ時。陳謝ニ言ナクシテ。寇讎ニ恨アリシ事。  
賴之尤其理ニ服シ候キ。サリナカラ自將軍至此  
出。而云。一旦將軍ヲ恨申サレシ故。左大臣殿モ氏尊  
事。其謂ナキニアラス。云々下同 仁木細川。兩家ヲ股肱トシテ。大樹累葉ノ九功ヲ  
光榮スヘシトコソ仰置レ候シニ。一家ノ好ヲ離

テ敵ニ降リ。多年ノ忠ヲ捨。戰ヲ致サレ候ハシ事。  
亡。魂ノ恨答ノ下迄深ク。不義ノ譏世ノ末迄モ朽  
ヘカラス。賴之苟モ此理ヲ存スル故ニ。全ク貴方  
ト合戰ヲ致ヘキ志ヲ廻サス。既往不咎ト申事候  
ヘハ。御憤今ハ是迄ニテコソ候ヘ。枉テ御方ヘ御  
參候ヘ。御分國已下。悉日比ニ易ラス申沙汰スヘ  
キニテ候。若又其モ御意ニ叶ハテ。御本意ヲ天下  
ノ反覆ニ達セント思召レ候ハ。賴之カナク四  
國ヲ捨テ。備中ヘ罷歸ヘク候ト。言ヲ和ケ禮ヲ厚

參考太平記 卷三

クシテ。頻ニ和睦ノ儀ヲ請レケルヲ相摸守心殘  
 ク信シテ。問答ニ日數ヲ經ケル間ニ。右馬頭中國  
 ノ勢ヲ待調ヘ。城郭ヲ堅ク拵テ。其後ハ音信モ十  
 カリケリ。相摸守ノ陣ハ白峯麓峯。金勝院右馬頭  
 ノ城ハ歌津ナレハ毛利家。北條家。西源院。其アハ  
 僅ニ二里ナリ天正異本寄ヤスル待テヤ戰フ  
 ト。互ニ時ヲ伺テ。數日ヲ送りケル程ニ數日。毛利  
金勝院。南都。天右馬頭ノ勢大略遠國ノ者共ナレ  
正本作數月ハ兵糧ニツマリテ窮困ス。角テハ右馬頭ハ讚岐

國ニハ堪ヘシト見ヘケル程ニ。結句備前ノ飽浦アヲ  
 薩摩權守信胤宮方ニ成テ信胤。金勝院。天正本。作  
 中既降南友而不詳何時復屬將海上ニ推浮フ。小  
 軍。此文路如今新降南友者。可疑笠原美濃守今川家。天正異本。作鹽飽十郎。毛利家  
 相摸守ニ同心シテ。渡海ノ路ヲ差塞ケル間。右馬  
 頭ノ兵ハ日々ニ減シテ落行。相摸守ノ勢ハ國々  
 ニ聞ヘテ夥シ。只魏將司馬仲達カ。蜀ノ討手ニ向  
 テ。戰ハテ勝事ヲ得タリケニ。其謀ニ相似タリ。七  
 月二十三日ノ朝自此迄。新開向。西長尾城。今川家。  
毛利家。金勝院本。有異說。詳出下。

參者太... 卷三

見<sup>可合</sup>右馬頭帷帳ノ中ヨリ出テ。新開遠江守真行  
ヲ近附テ宣ヒケルハ。當國兩陣ノ體ヲ見ルニ。敵  
軍ハ日々ニ増リ。御方ハ漸クニ減ス。角テ猶數日  
ヲ送ラハ。合戰難儀ニ及ヒヌト覺ル。是ニ依テ事  
ヲ計ルニ。官方ノ大將ニ中院源少將ト云人。西長  
尾ト云所ニ城ヲ構テオハスナル。此勢ヲ差向テ  
攻ヘキ勢ヲ見セハ。相摸守定テ勢ヲ差分テ城へ  
入ヘシ。其時御方ノ勢城ヲ攻ニスル體ニテ向城  
ヲ取テ。夜ニ入ラハ篝火ヲ多ク燒捨テ。異道ヨリ馳

歸リ。聽テ相摸守カ城へ推寄。賴之搦手ニ廻リテ。  
先小勢ヲ出シ。敵ヲ欺ク程ナラハ。相摸守縱一騎  
ナリトモ。懸出テ戰ハスト云事有ヘカラス。是一  
舉ニ大敵ヲ亡ス謀ナルヘシトテ。新開遠江守ニ。  
四國中國ノ兵五百餘騎ヲ相副。路次ノ在家ニ火  
ヲ懸テ。西長尾へ向ラレケル

○今川家。毛利家。金勝院本竝云。新開遠江守真行  
<sup>開金勝院本</sup>作<sup>關下</sup>。細川右馬頭ノ前ニ來テ申ケルハ。  
當國兩陣ノ體ヲ見候ニ。敵ハ日々ニ増リ。御方

參者太... 卷三



ハ漸々ニ滅シ候。角テ今十日二十日トモ成候  
ハ。御陣中ニ一騎モ残ルヘシトモ覺候ハス。サ  
ノ三勢ノスキ候ハ又先ニ。御合戰候ハテハ。一  
定難儀出来ヌト覺候。官方ノ大將ニハ。公家ノ  
中院源少將ト申人。西長尾ト申處ニ城ヲ構ヘ  
テ居ラレテ候ナル。真行ニ御勢ヲ五百餘騎給  
候ヘ。態白晝ニ相摸殿ノ陣ノ前ヲ打通テ。西長  
尾城ヘ寄候ハ。相摸殿定テ勢ヲ盡シテ西長  
尾城ヘシ合カセラレ候ハニスラン。其時真行

向陣ヲ取テ。西長尾城ヲ攻ニスル由ニテ。夜ニ  
入ハ潛ニ異道ヨリ馳歸テ。相摸殿ノ御陣ヘ推  
寄。思フ圖ノ合戰一度仕テ。天下ノ安否ヲ定候  
ハニト申ケレハ。右馬頭實モ然ヘシト思按シ  
テ。七月廿三日午刻ニ。新開遠江守ニ。四國中  
ノ勢五百騎ヲ相副テ。金勝院本西長尾城ヘ差  
向テ云々  
按ノ如ク相摸守是ヲ見テ。敵ハ西長尾城ヲ攻落  
シテ。後ヘ廻ラント巧ケルヲ。中院殿ニ合カセテ

ハ叶フマシトテ。舍第左馬助。從兄弟掃部助ヲ兩  
大將トシテ。千餘騎ノ勢ヲ西長尾城へ差向ラル。  
新開元來城ヲ攻ニスル為ナラ子ハ。熊日ヲ暮サ  
ント。足輕少々差向テ。城ノ麓ナル在家所々焼拂  
テ。向陣ヲ取タリケル。毛利家北條家金勝院南  
都本云。城ニ對揚シテ。高  
ク嶮ニキ山ノ岸ニ向城ヲ取云々城ハ尚大勢ナレハ。哀新開カ寄  
テ攻ヨカシ。手負少々射出シテ後。一度ニハツト  
懸出テ。一人モ殘サス討留ントク勇ケル。夜已ニ  
深ケレハ。新開向陣ニ篝火多燒殘シテ。山ヲ越ル

直道ノ有ケルヨリ引返シテ。相摸守ノ城ノ前。白  
峯麓へ推寄ル。金勝院本云。山ヲ越ル直道ノ案内  
者ヲ取テ。相摸守ノ陣ノ搦手ヘト  
馳向フ。云兼テ定タル相圖ナレハ。同二十四日ノ  
西源院本作二  
十三日非也辰ノ刻ニ。細川右馬頭五百餘騎ニ  
テ。搦手へ廻リ。搦手。毛利家金  
勝院本。作大手二手ニ分レテ。關ノ  
聲ヲソ場タリケル。此城元來鳥毛翔カタキ程ニ  
拵タレハ。寄手縦如何ナル大勢ナリトモ。十日二  
十日カ中ニハ。容易攻落スヘキ城ナラス。其上新  
開西長尾ヨリ引返スト見ヘハ。左馬助。掃部助。廳

參考太平記 卷五

テ馳歸テ寄手ヲ追拂ハシ事却テ城方ノ利ニ成  
ヘカリケルヲ相摸守ハイツモ已カ武勇ノ人ニ  
超タルヲ憑テ軍立餘リニ大早ナル人ナリケレ  
ハ寄手ノ旗ノ手ヲ見ルト均ク二ノ城戸ヲ開カ  
セ小具足ヲタニモ堅メス。袷ノ小袖引タリテ  
鎧計ヲ取テ肩ニ抱懸テ馬上ニテ上帶シメテ。只  
一騎懸出給ヘハ相從フ兵三十餘騎モ或ハ頬當  
ヲシテイマタ兜ヲモ著ス。或ハ籠手ヲ差テイマ  
タ鎧ヲ著ス。真前ニ裏連タル敵千餘カ中へ破テ

入此上諸本皆云。頼之勢五百餘騎。今諸本作千餘騎。相齧齧。哀剛ノ者ヤトハ  
見ナカラ。片皮破ノ猪武者。オユカマシクソ見ヘ  
タリケル。實モ相摸守敵ヲ物トモ思ハレサリケ  
ルモ理カナ。寄手千餘騎ノ兵共千。北條家。南。都本。作五百。為得。說見。上  
相摸守一騎ニ懸分ラレテ魚鱗ニモ進マヌ鶴  
翼ニモ圍得ス。此ノ塚ノ上。彼ノ岡ニ打上リテ馬  
人トモニ辟易セリ。相摸守ハ鞍ノ前輪ニ引附テ。  
子千頸ニセラレケル野木備前次郎野木。天正本。作野木。西源。  
院本。備前。株原孫四郎二人カ首ヲ太刀ノ鋒ニ貫  
作備中。

備前 株原孫四郎 二人カ首ヲ太刀ノ鋒ニ貫

參考太平記 卷三

テ差舉相摸守獲野木柿原唐土天竺鬼界大元ノ

事ハ國遠ケレハイニ夕知ス。吾朝秋津嶋中ニ生

レテ。清氏ニ勝ル手柄ノ者有トハ。誰モヤハイフ。

敵モ他人ニ非ス。キタナク軍シテ笑ハルナト恥

シメテ西源院本云。秋津嶋ノ中ニ生レテ。清氏ニ

テ只一一太刀モ打附ヘキ者ハ覺ヌ物ヲト呼リ只一騎猶大勢ノ中へ懸入給フ。飽マテ馬

強ナル打物ノ達者カ。逃ル敵ヲ追立追立斬テ落

セハ。其鋒ニ廻ル者。或ハ馬ト共ニ尻居ニ打居ラ

レ。或ハ塊ノ鉢ヲ胸板マテ破附ラレ。淤泥死骸ニ

地ヲ易タリ。爰ニ備中國住人陶山三郎ト。備前國

住人伊賀掃部助ト。二騎田ノ中ナル細道ヲ。閑ケ

ト引ケルヲ。相摸守追附テ切ント。諸鎧ヲ合テ攻

ラレケル處ニ。陶山カ中間ソハナル溝ニオリ立

テ。相摸守ノ乗給ヘル。鬼鹿毛ト云馬ノ草脇ヲソ

鏝タリケル自陶山三郎至此。西源院。天正本不出。

サレケレハ。淤泥死骸ニ地ヲ易タリ。爰ニ備中國

住人。真壁孫四郎是コソ相摸殿ヨト見タリケレ

ハ。馳達様ニ長鎧ノ柄ヲ取延テ。放此馬サレモノ

駿足ナリケレトモ。時ノ運ニヤ曳レケシ。一足モ

太平記 卷三

更ニ動カス。スクミテ地ニツ立タリケル。相摸守  
ハ近附テ敵ノ馬ヲ奪ハント。手負タル體ニテ。馬  
手ニツリ立。太刀ヲ倒ニツイテ立レタリケルヲ。  
真壁孫四郎馳寄。一太刀打テ當倒サントスル處  
ニ。相摸守走寄テ。真壁ヲ馬ヨリ引落シ。子子頸ニ  
ヤスル。人礫ニヤ打ト思案シタル様ニテ。中ニ差  
上テソ立レタル。伊賀掃部助高光ハ。懸合スル敵  
二騎斬テ落シ。鋒ニ餘ル血ヲ笠驗ニテ押拭ヒ。何  
クニカ相摸殿ノオハスラント。東西ニ目ヲ賦ル

處ニ。真壁孫四郎ヲ中ニ提ナカラ。其馬ニ乗ント  
スル敵アリ。穴駱オカレ凡夫トハ見ヘス。是ハ如何様  
相摸殿ニテソオハスラン。是コソ願フ處ノ幸ヨ  
ト思ヒケレハ。伊賀掃部助。畠ヲスチカヒニ馬ヲ  
真闇ニ馳懸テ。無手ト組テ引カツク。相摸守真壁  
ヲハ右ノ手ニカイ廻テ投棄。掃部助ヲ射向ノ袖  
ノ下ニ壓ヘテ頸ヲカント。上帶延テ後ニ廻レ  
ル腰ノ刀ヲ引廻サレケル處ニ。掃部助心早キ者  
ナリケレハ。組ト均シク抜タリケル刀ニテ。相摸

今川家  
今川家  
今川家

守ノ鎧ノ草摺ハ子アケ。舉様ニ三刀サス。刺レテ

弱レハ勿返シテ。雁ヘテ首ヲソ取タリケル。自レ此上真

壁孫四郎至此。今川家。毛利家。北條家。金勝院。南都本。與本文不同。可合見。

○今川家。毛利家。北條家。金勝院。南都本並云。相摸

守ノ馬。鎧ヲ急所ニ鏝コメレタレハ。小膝ヲ折

テトウト伏ハ。弓手ニ下立テ。敵ノ馬ヲ奪取テ

乘ント。大手ヲヒロケテ追ハレケルヲ。陶山三

郎馬ヲカヒ折テ。馳違ヒ様ニ。相摸守ノ右ノカ

イナヲ。懸スフツト斬テ落ス。馬ニハ離レヌ片

手ハナシ。乗替ノ馬ヤ有ト。後ヲ屹ト顧テ立レ

タル處ニ。伊賀掃部助馳寄テ。無手ト組テ岸ヨ

リ下ヘ轉落。落ル處ニテ相摸守上ニ成テ。掃部

助カ首ヲカント。左手ニテ腰刀ヲ拔ントシ

ケル間ニ。真壁七郎左衛門。北條家。南都本。作孫四郎。陶山三

郎矢野十郎。三騎落重テ。相摸守ヲハ討テケリ。

云云

サレモノ猛將勇士ナリシカトモ。運盡テ討ル

ヲ。知人更ニナカリシカハ。續テ助ル兵モナシ。森

今川家  
今川家  
今川家

今川家  
今川家  
今川家

新開道

次郎左衛門毛利家北條家西源院南都天正 鈴

木孫七郎行長本森作木村金勝院本次作三 一所ニ

テ討死スル御方モナシ其身ハ深田ノ泥土ニ塗

レテ首ハ敵ノ鋒ニアリ只元曆ノ古木曾義仲カ

粟津原ニテ討レ曆應二年當作曆 秋ノ初新田左

中將義貞ノ足羽ノ繩手ニテ討レタリニ二人ノ

體ニ異ナラス此下天正 西長尾城ハ向ラレタリツ

ル左馬助二十四日ノ夜明テ後新開カ引返シタ

ルヲ見テ毛利家北條家金勝院南都本云相摸守 舍弟左馬助ハ敵ノ出拔ケルヲ知ス

昨日ヨリ西長尾城ハ向テ新開ト戰ハンスル用

意シテ居タリケルカ二十四日曉ニ成テ新開カ

陣ノ簾幽ニ見ヘケル間人ヲ遣シテ見スルニ新

開ハ引返テ候ヤラン敵ハ一人モ候ハスト申ケ

ル云々是ハ如何様相摸殿御陣ノ勢ヲ外ヘ分サ

セテ差違フテ城ヘ寄ントタハカリケルヲ軍今

ハ定テ始リヌラン馳返テ戰ヘトテ諸鎧ニ策ヲ

ソヘテ毛利家北條家南都本 千里ヲ一足ニト馳

返リ給ヘハ新開道ニ待受テ難所ニ引懸テ平野

ニ開合セ入替入替戰フタリ互ニ討ツ討レツ東

西ニ地ヲ易南北ニ合ツ別レツ二時許戰テ新開

新開道

新開

新開院本云  
左馬助  
三十一

遂ニ懸負ケレハ。左馬助。掃部助兄弟。勝<sup>トキ</sup>関三聲揚  
サセテ。氣色ハウタル體ニテ。白峯城へ歸給フ。懸  
ル處ニ笠驗カナクリ捨テ。袖堯ニ矢少ク射附ラ  
レタル落武者トモ二三十騎。道ニ行逢夕リ。跡ニ  
追著テ。軍ノ様何ト有ケルソト問給へハ  
○金勝院本云。左馬助千餘騎ニテ馳返リ給へハ。  
新開イマ夕大手ノ軍ノ勝負ヲ知ス。左馬助カ  
勢ヲ城へ入ス。遮<sup>キ</sup>テ路ヲ塞キ相戰フ。互ニ勇ニ  
進テ。命ヲ限ト攻合ケルカ。新開終ニ懸負テ。右

三十一

往<sup>ヨリ</sup>左往<sup>サ</sup>ニカケ散サル。左馬助搦手ノ合戰ニ打  
勝テ思フ事モナク。相摸守カ城へ。氣色ハウテ  
歸リ入ントスル。笠驗カナクリ捨テ。誠ニシホ  
レカヘリタル兵共。東ヲ指テ落テ行。左馬助跡  
ニ附テ。大手ノ軍如何アリケルソト問給へハ。  
云云下同  
皆泣聲ニテ。早相摸殿ハ討レサセ給ヒテ候ナリ  
トソ答ケル。コハ如何トテ城ヲ遙ニ見上タレハ。  
敵早入代リヌト覺テ。見サリシ旗ノ紋共。城戸櫓

新開院本云  
左馬助  
三十一

三十一



參考大平詔 卷三

ノ上ニ幽揚ス。重テ戰ハントスルニカナク楯籠  
ラントスルニ城ナケレハ。左馬助掃部助落行勢  
ヲ引具シテ。淡路國ヘソ落ラレケル。其國ニ志ア  
リシ兵共。此事ヲ聞テ。何シカ皆心變シケレハ。淡  
路ニモ尚タマリ得ス。小舟一艘ニ取乘テ。和泉國  
ヘソ落ラレケル。是ノミナラス西長尾城モ攻ラ  
レ又前ニ落シカハ。毛利家北條家金勝院南都四  
天正本無西長尾城陷事  
國ハ時ノ間ニ靜リテ。四國毛利家金勝院本細川  
作阿波讚岐淡路三國  
右馬頭ニソ靡キ從ヒケル

和田楠與箕浦次郎左衛門軍事

南方ノ敵軍和田楠モ相摸守ニ兼テ相圖ヲ定テ。  
同時ニ合戰ヲ始ント議シタリケルカ。七月二十  
四日相摸守討レテ。四國中金勝院本  
不載四國大略細  
川右馬頭賴之ニ靡キ從ヌト聞ヘケレハ。日來ノ  
支度相違シテ。氣ヲ損シ色ヲ失テワ居タリケル。  
サモア。レ加様ニテ徒ニ日ヲ送ラハ。敵ハ彌勝ニ  
乘テ。諸國ノ御方降人ニナル者アリヌト覺レハ。  
一軍シテ國々ノ宮方ニ氣ヲ直サセントテ。和田

參考大平詔 卷三

四

楠其勢八百餘騎ヲ率シ。野伏六千餘人。六千北條家南都本。

作六十恐非也。金勝院本不載野伏。神崎ノ橋爪へ打臨。天正本云橋爪へ打臨テ。

大篝ヲ此比攝津國守護ヲハ。佐々木佐渡判官入

道道譽カ持夕リケレハ。其身ハ京都ニ在ナカラ。

箕浦次郎左衛門天正本云名俊定ニ勢百四五十騎附テ。

國ノ守護代ニソ置夕リケル。第三十二卷諸本云。箕浦次郎左衛門。文

和二年於江州真野浦。催促ノ國人取合テ。其勢僅

ニ五百餘騎。神崎ノ橋二三間焚落シテ。敵川ヲ渡

サハ。川中ニテ皆射落サント。鏃ヲソ口ヘテ待懸

夕リ。和田楠態敵ヲ夕ハカラシ。神崎ノ橋爪

ト。株瀨ト二箇所ニ打向テ控ヘ夕レハ。此ヲ渡サ

セシト。箕浦彌次郎西源院。天正本不出。同四郎左衛門。塩治

六郎左衛門天正本不出。六郎。今川家。毛利家。金勝院本。作次郎。下。餽之。今川家本無左衛

門。多賀將監西源院本。作。後藤。天正本。木村兵庫允

泰則木村。今川家。毛利家。北條家。金勝院。南都。天正本。作。上村。而。天正本無兵庫。允。泰則。字。下。餽之。

以下五十餘騎ハ五十。西源院本。作。百。株瀨へ馳向守護代箕

浦次郎左衛門。伊丹大和守。河原林彈正左衛門河

林。金勝院。芥河右馬允。中白一揆三百餘騎ハ。神崎

橋爪へ打臨。橋桁ハ元來燒落シタリ。株瀬ハ水汲  
シ。和田楠カ兵トモ。縦ヤタケニ思トモ。渡ヘシト  
ハ見ヘサリケリ。八月十六日ノ夜半許ニ。和田楠  
元ノ陣ニ尚控ヘタル體ヲ見セン為ニ。殊更簾ヲ  
多ク燒續サセテ。是ヨリ二十餘町上ナル。三國ノ  
渡ヨリ打渡テ。小屋野。富松。河原林へ勢ヲ差廻シ  
テ。富松。金勝院。西源院 敵ヲ河へ追ハメント取籠  
本。作。戸。松。下。飲。之。タリ。京勢ハ是ヲ夢ニモ知子ハ。徒ニ河向ニ敵イ  
タ夕控ヘタリ。躬ツク口ビシテ居タル處ニ。小屋

野。富松ニ當リテ。所々ニ火燃出テ。煙ノ下ニ旗ノ  
手數多見ヘタリ。是迄モ尚敵川ヲ越タリトハ思  
モ寄ス。燒亡ハ御方ノ軍勢共ノ手過ニテワ有シ  
ト油斷シテ。明行儘ニ後ヲ遣ニ見渡シタレハ。十  
餘箇所ニ羣雲立テ控タル勢。旗トモハ。皆菊水ノ  
紋ナリ。サテハ敵ハヤ川ヲ渡シテケリ。平場ノ懸  
合ハ叶フニシ。城へ引籠テ戰ヘトテ。淨光寺ノ要  
害へ引返サントスレハ。敵ハヤ入代リタリト覺  
テ。勝開ヲ作ル聲。淨光寺ノ内ニ聞ヘタリ。是ヲ見

參者太平記 卷三十一

テ中白一揆ノ勢三百餘騎ハ國人ナレハ案内ヲ  
知テ何ノ間ニカ落失ケシ。一騎モ殘留マラス。只  
守護ノ家人僅五十餘騎五十。毛利家。天正本。作百。西源院本作百四十五。  
思ヒ切タル體ニ見ヘテ。二箇所ニ控テ居タリケ  
ル二箇所。金勝院。本作三箇所。兩所ニ控タル勢。一所ニ打寄シ  
トシケルカ。敵ノ大勢ニ早中ヲ隔ラレテ叶ハサ  
リケレハ。箕浦次郎左衛門。東ヲ差テ落行ニ。兩方  
深田ナル細堤ヲ。敵斷切テ是ヲ打留ント。行前ヲ  
遮サキリ。道ヲ要テ取籠ル事。度々ニ及ヘリ。サレトモ

箕浦懸破テハ通り。取テ返テハ戰ヒケルニ西源院本

云。箕浦懸破テ戰ケルニ。死生ハ知ス七八騎斬テ落ス。云云一番ニ河原林彈正

左衛門ハ天正本載。寺倉五郎討レヌ。是ヲ見テ。芥河右馬允

スケナフ西源院本作。右馬允。資直。按以訓傳會為各乎可疑。引分レテ落テ

行ントシケルヲ。日比ノ口ニハ似ヌ者カナト。箕

浦ニ言ヲ懸ラレ。一所ニ打寄テ相伴フ。箕浦是ヲ

案内者ニテ。數箇所ノ敵ノ中ヲ道レ出。都ヲ差テ

ソ上リケル。下ノ手ニ控ヘタル者共ハ。落方ヲ失

テ。惘然トシテ居タルヲ

參者太平記 卷三十一

四

參考太平記 卷三十八

○西源院本云。諸人落方シ失テ。惘然トシテ居タ  
リケル處ニ。箕浦四郎左衛門進出テ申ケルハ。  
御方小勢ナリトモ。志シ同シテ戰ナハ。日本ニ  
雙ナキ弓取ト名シ得タル和田楠カ間ニ。一人  
モナトカ打取テハ有ヘキト云モ果サル處ニ。  
和田カ先懸ノ兵三百餘騎ニテ推寄テ。開シ咄  
トソ揚タリケル。佐々木カ勢少モヒルマ。ス擊  
テ懸リ。火出ル程戰テ。左右ヘ颯ト引退ク。始百  
騎許ト見ヘシ。佐々木カ勢。或ハ討レ。或ハ創ヲ

被リ。散々ニナリケレハ。以上七騎ソ残りケル。  
和田楠モ。ヨキ者數多討レケレハ。兩陣暫息ツ  
キ居タリケル。云云 下同 本文  
木村兵庫允泰則 西源院本作泰範。此。兵共ノ掟。面  
面存知ノ前ナレトモ。戰難儀ナル時。死ナントス  
レハ生<sup>イキ</sup>生ントスレハ死スル者ニテ候ワ。只幾度  
モ敵ノナキ方ヘヒカテ。敵ノ大勢控ヘタラン所  
へ懸入テ戰ハンニ。討レハ元來ノ儀。討レスハ懸  
援テ。西ヲ指テ落テ行ンニ。敵モ流石命ヲ捨テハ。

卷三十八

サノ三長追ヲハシ候ハンヤ。云處實モト思ハハ。  
泰則ニ續ケヤ人々ト云儘ニ。淨光寺ノ前ニ。百騎  
許控ヘタル敵ノ方ヘ。馬ヲ引返シテ歩マセ行。敵  
是ヲ見テ。是ハ何様降人ニ出ル者カト。少猶豫ニ  
テ控ヘタル處ニ。歩立ナル石津助五郎行泰ニ矢  
ニ筋三筋射サセテ。敵ノ馬ノ足些<sup>チ</sup>レト口ニナレ  
ハ。三騎ノ者トモ。オツト喚テ懸入。百騎許控ヘタ  
ル敵。颯ト分レ靡キテ。敢テ是ニ當ラントセス。只  
射手ヲ進メテ射サセケル程ニ。箕浦彌次郎討

又金勝院本作彌三郎。同四郎左衛門南都本作次郎。此上同本文相齟齬。即此上同本深手ヲ負テ田中ニ伏タリ。

○西源院本云。木村泰範。我ニ續ケ人々トテ引返  
シテ歩<sup>イ</sup>セ行。是ハ降人ニ出ルカト楠カ勢少猶  
豫シケル處ニ。田上。石澤。杉。芥川ニ。矢ニ筋射サ  
スル程コソ有ケレ。喚テ懸レハ。寄手ノ兵是ヲ  
見テ。死狂スルフテ武者共ナリ。只置テ馬ノ足  
ヲ疲カセトテ。小川ノ有ケルヲ前ニ當テ引退。  
敢テ戰ハントモセス。散々ニコソ射サセケレ。

去程ニ多賀左近將監ハ。馬ノ平頸ニ太刀斬レ  
テスクミケレハ。下立テ歩立ノ者ニツレ交リ。  
近附敵ヲ射拂テコソ落行ケレ。箕浦彌次郎ハ。  
犬死セシトヤ思ケニ。和田カ兵ノ群立テ控タ  
ル中へ。只一騎懸入ケル。志ノ程ハ猛ケレトモ。  
十六歳ノ若武者ナリ。敵ハ騎ニ取籠ラレテ討  
レケリ。同四郎左衛門ハ。内塊ニ深手負テ。田中  
ニ伏タリケルカ。姪彌次郎討レケルヲ聞テ。既  
ニ腹ヲ切ントシケルヲ見テ。堀新右衛門走寄。

取テ引立テ。我ニ劣ラ又大男ノ一縮シタルヲ。  
鎧ノ上ニカイ負テ。持タル長刀ヲモリキニシ  
テ。尼崎道場迄。只一息ニソ負行ケル。云云。  
鹽冶六郎左衛門六郎今川家金勝院本。此上作次  
即今作四郎相齧齧西源院本云。  
六郎左衛門モ三所。木村兵庫モ馬ノ平頸草脇ニ  
迄手負タリ。云云。深田ノアゼニ下立  
所射サセテ。西源院本云。馬ヲ。深田ノアゼニ下立  
タリ。スハヤ討レヌト見ヘケルガ。木村兵庫放レ  
馬ノアリケルニ打乗テ。徒歩ニ成タル鹽冶ヲ。馬  
ノ上ヨリ手ヲ引テ。金勝院本云。泰則ハナレ馬ニ  
打騎テ。徒立ニ成タル鹽冶ヲ。

敵味方ノハナレ馬イカホトモ多キニ打ノセ。馬ノ上ヨリ手ヲ引合。云々下同。尼崎へ落

テ行。敵跡ニ附テモ追サリケレハ。道場ノ内ニ一

夜隠レ居テ。翌ノ夜京へ上リケル自、此、上河原林彈正左衛

門戰死至此。天正本、文甚簡省。與本文不同。可合見

○天正本云。川原林彈正左衛門。寺倉五郎討レケ

レハ。下手ニ控タハ。箕浦次郎左衛門尉。上村兵

庫助。鹽冶六郎左衛門尉。ウス卷テ控タハ敵ヲ

追拂。御方ノ道ヲ開カント。散ケニ行跡ケルニ。

馬ノ平頭三頭斬レ又者モナカリケリ。四郎左

衛門四郎。疑、次郎。之、訛、手餘ニ手痛、敵ニ打合テ。壘ノ真額

小手ノハツレ。透間アル程手負テ。馬ニ離ナカ

ラ思フ程戰テ。力盡又レハ叶ハス。深田ノ畔ニ

少伏タリケル。同彌二郎同所ニテ討死ス。此者

共如此成シカハ。御方兵散ケニナリテ。都ヲ指

テ引歸シケリ。云云下同。本文。

和田楠等。只一軍ニ攝州ノ敵ヲ追落シテ。勝ニ乘

トイヘトモ。赤松判官光信濃彦五郎天正本作、兵

兄弟。猶兵庫ノ北ナル多田部城ニ籠テ金勝院本



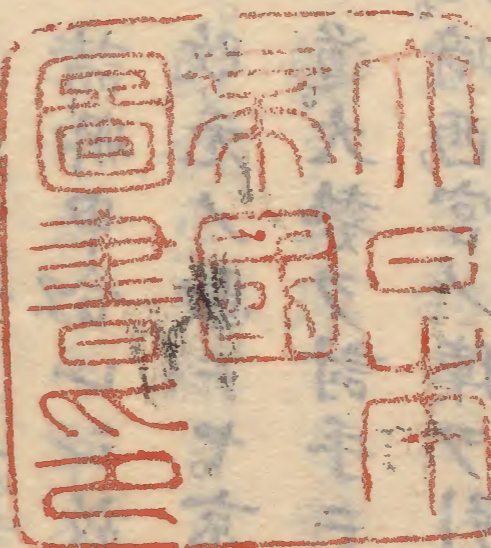
兵庫湊河ヲ管領スト聞ヘケレハ。九月十六日石  
 堂右馬頭和田楠三千餘騎ニテ。兵庫湊川へ推寄。  
 一宇モ残ラス焼拂フ。此時赤松判官兄弟ハ。多田  
 部。山路。二箇所ノ金勝院本作大城ニ籠テ。敵懸ラ  
 ハ爰ニテ利ヲセント待懸ケルカ。楠如何思ヒケ  
 ン。臆テ兵庫ヨリ引返シケレハ。赤松出合ニ及ハ  
 ス。野伏少々城ヨリ出シテ。遠矢射懸タル計ニテ。  
 ハカハカシキ軍ハナカリケリ。都ニハ同九月晦  
 日當作二十三日。公卿補任。皇年代畧記云。改元有  
康安二年九月二十三日改元。貞治云々

テ。貞治ト號ス。是ハ南方ノ蜂起。サテモヤ靜ニル  
 ト諸卿申合レシ故ナリ皇年代畧記云。依テ兵革實  
流行天變地妖改元  
 モ改元ノ驗ニヤ。京都ヨリ武家ノ執事尾張大夫  
 入道。大勢ヲ討手ニ下スト聞ヘケレハ。和田楠又  
 尼崎西宮ノ陣ヲ引テ。河内國へ歸リ又天正本云。  
和田楠河  
内へ歸ケレハ。其時ノ管領足利修理大夫入道大  
勢ヲ差下シカハ。國ハ無為ニソ成ニケル云々  
 同是ヲ聞テ。山名伊豆守時氏力勢ノ丹波和久ニ  
 居タリシモ。因幡國へヲ引返シケル。今年天下既  
 ニ同時ニ亂テ。官方眉ヲ開キ又ト見ヘケルカ。程

ナク國々静マリケルモ。天運ノイマタ至ラヌ處  
トハ云ナカラ。先ハ細川相模守カ。粗忽ノ軍シテ  
云甲斐ナク討死ヲセシ故ナリ

大元軍事

此段作者引テ元滅宋ラ之事評ス細川  
清氏為細川頼之敗死今除之



參考太平記卷第三十八

